



一般社団法人 日本顕微鏡歯科学会

第20回学術大会・総会 シンポジウム

大会長：寺内吉継

実行委員長：表茂稔

歯科領域における顕微鏡手術の歴史と展望

三橋 純

デンタルみつはし

「これは防腐, 無菌, 麻酔の導入によって手術が大きく変わったことに匹敵します」(H.L.ヴルシュタイン)、「外科における第二の革命 (Uトレーラー)」(マイクロサージャリーの歴史; アドルフ・ミールケ著、田中博之、田中紀久子訳、CAP 出版 より)

これは顕微鏡手術の黎明期に外科領域にもたらした衝撃の大きさを表現した言葉である。この耳鼻科領域で生まれた波紋は直ぐに婦人科、眼科、引いては脳神経外科の誕生へと留まることなく波及した。この波はかなり遅れて歯科にも及んだが、その用法には独自の工夫がなされた。それがミラーの使用である。医科領域ではいわゆる“直視直達”を原則とするために、直視を阻む硬組織は削除し、軟組織は圧排することで視野を確保している。例えば内耳の手術に当たり乳様突起を削開することも多い。

ところが歯科での最初の顕微鏡治療である根管治療においては根管を観察するために頭頸部を削除するわけにもいかず、ミラーを用いて視座を口腔内へ入れて治療をする工夫がなされた。従来ミラーを必需品として記録、治療に用いていた歯科においては至極当たり前とも言うべき工夫ではあったものの、医科領域では成し得なかった“顕微鏡手術における革命”とでもいうべきものであった。つまり、顕微鏡を間接的に口腔という体の内部に入れることを可能にしたのである。これは今現在でも医科では採用されることはなく、歯科独自のものに留まっているが、顕微鏡の視座を体腔に入れる、というパラダイムシフトを起こしたのである。

一方、医科ではミラーではなく胃カメラ、血管内視鏡、腹腔鏡、引いてはロボテックサージャリーを開発、発展させて“視座を体腔に入れて詳細に患部を観察しながら手術を行う”ことで治療の可能性を広げている。

本講演では歯科独自、特に日本においてその発展を遂げている顕微鏡歯科治療を総覧し、その可能性と限界を明らかにし、これからの顕微鏡歯科治療の進むべき道を探る。

◀ 略歴

新潟大学歯学部卒業

日本顕微鏡歯科学会認定指導医

日本大学客員教授

デンタルみつはし